

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞 作品集

令和5年度 第3回 ～「歌」～



はじめに

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞は、子どもたちに詩を身近に感じてもらい、詩を書くきっかけとなつてほしいとの願いから、「はじめり」という意を込め、丸山薫の第一詩集「帆・ランプ・鷗」より命名いたしました。

第三回となる今回は、丸山薫の詩のタイトルに多く使われている「歌」をテーマに作品を募集したところ、全国の小学生、中学生、高校生から多数のご応募をいただきました。どの詩も歌にまつわるエピソードや様々な感情を表現した楽しい作品となっており、この賞を実施している意義を改めて実感しているところです。

この作品集には、「帆・ランプ・鷗」賞、優秀賞及び佳作の作品を掲載しております。入選された皆さまに心よりお祝い申し上げます。また、作品集を手にとられた方には、子どもたちの素晴らしい作品をご覧いただければ幸いです。

この賞をきっかけとして、全国の子どもたちに豊橋ゆかりの詩人・丸山薫を知っていただくとともに、詩を書くことを通じて豊かな感性や表現力が生まれ、詩に親しむ文化が広まるよう願っております。

最後に、賞の実施にあたりご協力いただいた丸山薫賞運営委員会の皆さま、並びに、審査にご尽力いただいた選考委員の先生方に心からお礼申し上げますとともに、ご応募いただいたすべての皆さまの今後益々のご活躍をご祈念申し上げます、発刊の挨拶とさせていただきます。

令和六年二月三日

豊橋市長 浅井由崇



目次

はじめに

【小学生の部】

入選作品	選者	高橋 順子	6
入選作品選評			20
選者作品			23

【中学生の部】

入選作品	選者	高階 杞一	28
入選作品選評			41
選者作品			44

【高校生の部】

入選作品	選者	中本 道代	48
入選作品選評			64
選者作品			67

丸山薫の略歴と業績



【小学生の部】

選者

高橋

順子



「帆・ランプ・鷗」賞

みーちゃんのはなうた

愛知県豊橋市立つつじが丘小学校

二年 すすき しおり

優秀賞

サッカーの歌

愛知県豊橋市立旭小学校

三年 竹内 寛人

よるのうた

愛知県豊橋市立つつじが丘小学校

二年 福澤 瑞生

はみがきのうた

愛知県豊橋市立豊小学校

一年 まえかわ そうし

うたはたのしい

愛知県豊橋市立栄小学校

一年 多田 葵翔

大きな声で歌えないぼく

愛知県豊橋市立福岡小学校

五年 夏目 空風

佳作

にじ

愛知県豊橋市立鷹丘小学校

三年 近藤 奏心

ウタって不思議？

愛知県豊橋市立汐田小学校

六年 中村 莉羽





僕は歌がきらいだ

愛知県豊橋市立松山小学校
六年 西島 諒

うたいだす

愛知県豊橋市立旭小学校
三年 小澤 拓真

花火の歌

愛知県豊橋市立野依小学校
六年 伊藤 紗來

おじぎそう

愛知県豊橋市立栄小学校
二年 むらこし よう

いちばんおもしろいうた

愛知県豊橋市立牛川小学校
一年 本多 葵登

わたしのおうえんソング

愛知県豊橋市立牛川小学校
三年 鈴木 りお



入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

みーちゃんのはなうた

みーちゃんは犬
はなうたうたう

さみしいとき ピー

へやにでたいとき ヒー ワフツ

ごはんたべたいとき フン ウワン

つかれたとき フガフガ

みーちゃんは、はなうたうたう

愛知県豊橋市立つつじが丘小学校
二年 すすき しおり

優秀賞

サッカーの歌

愛知県豊橋市立旭小学校

三年 竹内 寛人

サッカーには、いろいろな音がある
つよいシュート バン
はやいドリブル スー
ヘディングシュート バシ
きれいなトラップ ポン

サッカーには、いろいろな声がある
チームメイトがよぶ声 ヘイヘイ
コーチがよぶ声 オーイオーイ
ゴールがきまった声 ナイシュートナイシュート
おうえんの声 いけいけファイトファイト
サッカーにはいろいろなリズムがある
ドリブルのリズム タンタン タンタン
トントントン スー トン タン タン
トラップしてシュートのリズム ポンパン
トントントン トントントン
サッカーには、いろいろな体の音がある
ボールをおいかける足の音タッタッタ

いきづかいの音ハアハア 心ぞうの音バクバク
サッカーはみんなで一つのボールをおいかけ
つなぎあいゴールを目ざす。

サッカーはみんなであいてチームのボールを
とりに行ったり、シュートをとめたりして
ゴールを守る。

サッカーは一つのボールがコート中をかけ
まわり、いろいろな音、いろいろな声、いろ
いろなりズムをうむ。

サッカーはしあいごとにちがった音、声、
リズムがある。

サッカーはしあいごとに新しい楽しみ、
うれしさ、くやしさが生まれる。

またつぎのゲームで新しい音、声、リズム
が新しい歌を作り、新しい感動をうむ。

よるのうた

愛知県豊橋市立つつじが丘小学校
二年 福澤 瑞生

たいようがしずんでよるになったよ

お父さんも ねむねむねむたい

お母さんも ねむねむねむたい

お兄ちゃんもお姉ちゃんも 犬のクーも

カメのナナも ねむねむねむたい

わたしは お月さまを見てみたよ

そしたらね お月さまは ねむねむして

ないよ

お月さまは

「みんなとあそびたい。」

といって ピカピカ光ってたよ

けれどね きれいなお月さまを見ていたら

わたしも ねむねむねむなくなっちゃった

お月さま お休みなさい

ゆめの中で いっしょにあそぼうね

はみがきのうた

しゃかしやか

しゅしゅしゅしゅ

しゃしゃしゃしゃ

ゴシゴシゴシゴシ

ブクブク、ブクブク、ゴックン…

あーまちがえた。

ブクブク、ブクブク、ペー

ブクブク、ブクブク、ペー

ピカピカ。

しあげおねがいします。

愛知県豊橋市立豊小学校

一年 まえかわ そうし

うたはたのしい

愛知県豊橋市立栄小学校
一年 多田 葵翔

うたはたのしい
うたうとげんきがでる
みんなでうたうとおもしろい
すきなうたをうたうともっとすきになる
1がっきにとどいたぴあにか
はやくひきたいな
うたはたのしい
みんなでうたをつくるとたのしくなる
じぶんがうたうとたのしくなる
じぶんがきもちよくうたうとすつきりする
おもしろいうたをうたうとじぶんがおもしろく
なる
じぶんがこころのうたをうたうときっぱりする
うちゅうのうたをうたうときれいになる

大きな声で歌えないぼく

愛知県豊橋市立福岡小学校

五年 夏目 空風

「ぼく死ぬのかな？」

コロナウイルスにかかり四十度の熱が出てお母さんに聞いた。

「だいじょうぶだよ」

「静かにねていれば治るよ」

ぼくは家族にうつきまないように二階のへやですごすことになってしまった。

「ドンドンドン ドンドンドン」

一階で弟が走り回る音がたいこの音に聞こえてきた。

「バタン バタン」

一階で弟がドアをあけしめする音がシンバルの音に聞こえてきた。

「ドンパタドンパタ ドンパタドンパタ」

一階から二階へお母さんがあがってくる音が聞こえてきた。

「おなかすいた？」

「ゼリーしか食べられない」

熱も下がらず食よくもないぼく。もう少し静かにねていよう。

「ドオーン ドオーン ドオーン」

お父さんが会社から帰ってきた音が大きいことに聞こえてきた。

「ザー ザー ザー」

雨が地面にあたる音がバイオリンに聞こえてきた。

「チュンチュン チュンチュン」

小鳥が歌を歌っている。

ぼくのへやはコンサート会場だ。みんながぼくをほげましてくれた。ぼくも大きな声で歌いたいな。

熱も下がり完全回復したぞ。

「一階におりてきていいよ」

お母さんがぼくに言った。

「にいにいー」

弟がぼくをだきしめてきた。

「丸書いてちよん 丸書いてちよん」

ドラえもんの絵書き歌を弟と大きな声で歌った。大きな声で歌えるってしあわせだな。

佳作
にじ

教室で、朝の会の時
みんな、なかよく
元気に歌う歌ごえで
音ぶが出てきたよ
また歌い出すと
次次音ぶが出てきて
音ぶが、みんなをかこつたよ
歌がおわると
音ぶが空にきえて
空を見ると、にじがでていた
みんなとても、えがおになりました。

愛知県豊橋市立鷹丘小学校
三年 近藤 奏心

ウタって不思議？

愛知県豊橋市立汐田小学校
六年 中村 莉羽

ウタって不思議

聞いたら心がぼかぼか体はるんるん

歌って不思議

ふつうに歌ったら「歌」かつこよくウタったら

「ウタ」かわいくうたったら「うた」ってもじと

つながってる

うたって不思議

聞く人によって感じ方歌う人によって歌に

こめる気持ちが変わるの

うたって歌ってウタって不思議？うたって

歌ってウタって感情？

うたって歌ってウタって何だろ

僕は歌がきらいだ

愛知県豊橋市立松山小学校
六年 西島 諒

僕は歌がきらいだ
すごくすごくきらいだ

高い声も

低い声も

高い音も

低い音も

歌の歌詞でさえもきらいだ

僕は歌がきらいだ

いつもいつでもきらいだ

でも好きなこともある

僕は歌がきらいだ

演奏などは好きだけど

やっぱり歌はいやなんだ

いやだいやだいつてるが

好きな曲はないとは言わない

歌はとて難しい

強弱記号や音ぶの高さ

いっぱいいっぱいいたくさんあって

あればあるほど難しい

僕は歌がきらいだ

歌はとっても難しい

難しいったら難しい

僕は歌がきらいだ

だつて歌うのも難しい

音ぶを読むのもいやなのに

歌うのなんかいやすぎる

僕は歌がきらいだ

きらいだけど歌うのだ

授業の時はがんばるが

やっぱり歌はいやなんだ

歌にもいいこと少しある

それはみんなと歌えることさ

うたいだす

ひらひら
ちようちよ
いるかな
いるかな
はたけにいつてみよう
ぶんぶん
みつばち
カサカサ
トカゲ
はるがきた
たんぼは
たうえ
はたけは
しんめ
のはらには
花がさく
はるがきた
むしはいるかな

花はさくかな
はるがきた
むしもうたいだす
しよくぶつもうたいだす
ぼくもうたいだす

愛知県豊橋市立旭小学校
三年 小澤 拓真

花火の歌

愛知県豊橋市立野依小学校
六年 伊藤 紗來

パツと光り、空に咲いた
花火におくれ

ボンツと大きな音なる

空に咲いた瞬間流れ落ちた

花火から

シヤララと不思議な音なる

だれかが持つ筒の中から

噴火のように火柱が噴出し

シュワーとキレイな音から

ボンと大きな音なる

みんなで持つぼうの先から

たきのように火の糸が流れていき

シヤーシヤーパチパチと

ステキな音なる

みんなでしゃがんで持つ糸の先

小さな花火が光って
プチ、シヤ〜と
おもしろい音なる

いろんな花火が出す音で
花火の歌が生まれてく

おじぎそう

愛知県豊橋市立栄小学校
二年 むらこし よう

おじぎそうがうごく
いきてるようにうごく
よろんでるようにみえる
そのうちひらく
たのしんでるようみえる

おじぎそうがうごく
いきてるようにうごく
おもしろくうごくうごくうごく
おどってるたのしんでるうたつて
うたつてるうごいてるうごくうごく

おじぎそうがうごく
いきてるようにうごく
うたつておどつてたのしんでる
たのしいたのしい
たのしくうたうよ
おじぎそう

うごくうごく
おもしろいようにうごく
うたつておどるよ
たのしくりずむにのつて
うごくよ

おじぎそうがうごく
いきてるようにうごく
うごくうごくよ
みんなでりずむをなかくおどるよ
うたうよ
たのしく
うごくうごくうごくうごくよ
たのしくりずむをとるよ
たのしく
うごくうごくよ
たつのしく
うごくよ

いちばんおもしろいうた

愛知県豊橋市立牛川小学校

一年 本多 葵登

うたっていいよねたのしくなるね
どれみふあそらしど
もつというろいろなおとがでてきそう

ぼくのくちからうたがでるよ
たのしいときはとくべつなうただよ
ぼくがうたうと、おとうさんもおかあさんも
おにいちゃんもわらうよ
わらってくれたらうれしくて
もつともつとおもしろいうたがでるんだよ

ちよつとだけかなしいきぶんのときも
うたをうたえばげんきになるよ
やっぱりうそ！
げんきにならないときもあるよ
そんなときもあるんだよ

ぼくがうたったおもしろいうたは

ぜんぶおなじじゃないんだよ
おなじうたはにどとうたえないんだよ
ぼくはすぐわすれちゃうからね
どんどんつぎのうたをおもいつくからね

みんなをわらわせたいから
ぼくはまいにちうたをうたうよ

わたしのおうえんソング

愛知県豊橋市立牛川小学校
三年 鈴木 りお

赤えんぴつがみじかくなっちゃった

新しいのにかえなくっちゃ

あれっ？あれあれ？

赤えんぴつがない・・・

お母さんはいそがしそう

お兄ちゃんやお姉ちゃんも遊びにいっちゃった

どうしよう

そうだ！1人ではじめてかい物にいこう！

そうときまればゆつくりとはしていられない

お金、よし！

ヘルメット、よし！

自てん車にのって1人たび、しゅっぱつ！

気合いじゅうぶん、わくわくどきどき

わたしはりっぱな3年生、りっぱなお姉さん

車にひかれないようにきをつけなくっちゃ

右よし！左よし！

はな歌うたいながらわたしのおうえんソング

らんらん、るるんおかい物

鳥も太ようもねこも犬もおうえんしてくれている

でもね、じつはとつてもきんちようしていたの

いつもみなれた町なのにしらない世界にまよい

こんだみたい

どきどきがぐがく

あれっ？あれあれ？

道まちがえちゃったよ・・・

おばけなんてでてこないよね・・・

なんとかお店についてひとあん心。

よくいくお店はずなのになちがうお店に見えて

きちゃった

赤えんぴつを見つけてにぎりしめてレジに向かう

ピツとなる音がよけいにきんちようしちゃう

お金たりるよね？

やったー！やったー！大せいこう！

赤えんぴつにぎりしめ気もちよく自てん車を

こぐわたし

みなれた道を風を切って自てん車をこぐわたし

うたはたのしい

多田 葵翔

うたをうたうと、げんきがでたり、すつきりしたりする。うたは、じぶんをかえてくれる。「うちゅうのうたをうたうと
きれいになる」というところにかんしんしました。うちゅうがきれいにみえるとは、うらやましい。

大きな声で歌えないぼく

夏目 空風

コロナウイルスにかかって、ねこんでしまった「ぼく」。弱った身には家族のたてる音が太鼓やシンバルに聞こえる。そのうち小鳥の声が聞こえて「ぼく」は回復する。感動的な展開です。あたたかな、いい家族ですね。

佳作

にじ

近藤 奏心

だれも思いつかないことをよく詩にしました。きっとにじのように、きれいな歌だったのでしよう。

ウタって不思議？

中村 莉羽

日本語のふくざつな説明しにくいところを詩にしました。立ちどまって考える詩ってすきだと思う。

僕は歌がきらいだ

西島 諒

たいていの人はこういうとき、歌が好きだと書く。それをきらいだと書くのは勇気がある。さいごの行がすごくいい。

うたいだす

小澤 拓真

リズム感覚がいい。春になって、むしも、しょくぶつもうたいだす。自分もうきうきする感覚もいい。

花火の歌

伊藤 紗来

花火は目を楽しませてくれるものですが、耳も楽しませてくれるのは忘れがち。不思議な音をよくとらえましたね。

おじぎそう

むらこし よう

ほんとに、たのしそう。「いきてるように」というところは「どうぶつのように」とか「ひとのように」にしたら？

いちばんおもしろいうた


本多 葵登

じぶんでつくったうたをうたうと、まわりのひとがわらってくれるのは、うれしいですね。かなしいときのうたも、ききたいな。

わたしのおうえんソング

鈴木 りお

冒険が歌になったのですね。赤えんぴつが買えてよかったね。きびきびして、きもちのよい歌です。




選者作品

三河みかわの歌

高橋順子

じゃんだらりん
じゃんだらりん
三河の人はときどき
鈴が鳴るように話す
三河のお婆は
「久しぶりじゃん
何日泊まってってもいいだらー
はやく上がりん」
鈴を鳴らして
迎えてくれる
きれいな川が流れ
山々が青い
旧東海道の松並木を
じゃんだらりん
じゃんだらりん
むかしといまの旅人が通る



【中学生の部】

選者

高階

杞一



「帆・ランプ・鷗」賞

どれみの歌

愛知県豊橋市立南部中学校

二年 小酒井 仁菜

優秀賞

木の歌

愛知県豊橋市立南陽中学校

一年 赤柄 袖希

思い出歌

愛知県豊橋市立石巻中学校

三年 小林 優花

佳作

運動場の砂の歌

愛知県豊橋市立南部中学校

二年 伊藤 寿真

音符列車に乗って

愛知県豊橋市立高師台中学校

三年 宇野 真輝登

空の歌

愛知県豊橋市立牟呂中学校

三年 大野 実咲

盆休み

愛知県豊橋市立南部中学校

三年 杉浦 遼将

花火の歌

愛知県豊橋市立南陽中学校

一年 羽田野 陽子





自然の歌

庭の草花・夏謳歌

アリの歌

かみさまの歌

愛知県豊橋市立南部中学校

一年 古池 音々

愛知県豊橋市立南部中学校

二年 日高 由菜

愛知県豊橋市立南部中学校

一年 佐藤 来菜

愛知県豊橋市立南陽中学校

一年 テンプロ アンドレア



入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

どれみの歌

愛知県豊橋市立南部中学校

二年 小酒井 仁菜

どこへだって つれていきたい
ちっちゃくて すべすべで
時々熱くなる 大切な君
いなくならないように
見失わないように
ぎゅっと手をにぎる

れんらくくると うれしくなる
今日はなにをして遊ぼうか
写真を撮りに出かけようか
それともいっしょに音楽でも聴こうか
映画をみるってのもアリだね
いつもの合図で心がおどる
みつめてしまう じっと君を

動くところを コロコロと
次から次へと変化して
いつまでだって見ていられる
青い光に照らされて
私の瞳は刺激を受ける

ファイト 元気だして
へこんでるときの言葉って
どうしてこんなに響くのだろう
離れたところにいても ちゃんと届く
大切なメッセージはピン留めして
私の心に保存する
そろそろねむくなってきた
今日もたくさん遊んだね

疲れちゃったから寝よう

しっかり寝て しっかり充電して

また明日もいっしょにいよう

君としたいこと たくさんあるから

ランドセル 背負ってたあの頃は

まだ出逢えてなかった

君といるだけで

新しい世界が目の前に広がり

便利さと危うさのはざままで

私は考える

知らないこと 知らない世界

なんだって指一本でこたえてくれる君は

私をあやつる魔法つかい

こんなにも大好きで

こんなにもいっしょにいたいこの気持ち

おとなにはわかる？

だから

どんなときだって最優先で

君のもとへとんでいくよ

「ピロピロピロ」

ほらまた君がよんでいる

ちっちゃくて 大切な君を持ち上げて・・・

「はい、もしもし」

優秀賞

木の歌

たくさんある木も
実際には何年もかかってグングンと
少しずつ大きく育って
今ある木になっている。

長い人生を
おくらしているのかも。

大きな木になるまでに
葉が生えて
秋になれば茶色くなって
ひらひらと葉が落ちていく
大きくなりながら
姿も変わっているのだ。

風にあたって
葉や枝がゆらゆらと
ゆれているその木も
実は

愛知県豊橋市立南陽中学校
一年 赤柄 袖希

思い出歌

歌は思い出を連れて来る
香りがそうであるように

写真に残していない思い出も

忘れていた出来事も

その時の感情さえも

歌ひとつでよみがえる

母と歌って歩いたさんぽ道

お遊戯会の後の里芋の味

卒業式の先生の顔

ああ、友と歌う大好きなこの歌は
いつかの私にどんな思い出を
連れて来るだろう

愛知県豊橋市立石巻中学校
三年 小林 優花

佳作

運動場の砂の歌

愛知県豊橋市立南部中学校

二年 伊藤 寿真

もう朝か

気付けば朝日がのぼっている

暑くはないよ

砂だからね

みんなに踏まれる

でも痛くはないさ

砂だからね

だけど地面をほりおこすのはやめてくれ

砂だけどね

砂にだって嫌なことはあるんだよ

音符列車に乗って

愛知県豊橋市立高師台中学校

三年 宇野 真輝登

平坦な道を歩く言葉

たくさんの言葉が集まり歌となる

歌は5線をすすむ音符列車に乗る

スキップしたり走ったり

歩いたりとまったり

いろんなリズムで必ず進む

繰り返すことはあってもどらない

だから歌が好き

合唱はみんなの力を一つ前に進む

バスやテノールの心臓にひびく声

アルトやソプラノの美しい声

すべてが音符列車に乗ってつきすすむ

声と声がおいかけっこする

だから歌が好き

お風呂に入っているとき

トイレに長い間入っているとき

ちよっと楽しみにしていることがあるとき

つい口ずさんでしまう歌

ちよっと悲しいことがあったとき

部活の試合で負けてくやしいとき

弟とけんかしたとき

歌をきくと心が落ち着く

なぜだろう

歌を歌うとスキップしたくなる弟

なぜだろう

歌を歌うとゆれなくなる自分

なぜだろう

歌を歌うと手拍子したくなるお父さん

歌はいつもみんなをつれて音符列車に乗っていく

どんなときでも自分にとって歌は必要

歌は自分にとって大事な心の栄養剤

だから歌が好き

だから音楽が好き

空の歌

愛知県豊橋市立牟呂中学校
三年 大野 実咲

ふと目に映った空を歌にしよう

宵の空の歌を

朝日がさした空の歌を

群青色の空の歌を

あなたが今見た風景は
もう二度と現れない

琥珀色の空の歌を

あなたの住む町の空の歌を

どこへ行くのか

どこまで続いているのかわからない

あなたが知らない間に

空は姿を変えていく

そんな空を歌にしよう

だからその一瞬の空を

歌にしよう

ふと目に映った空を歌にしよう

思うがままに

薄黒色の空の歌を

七色で染められた空の歌を

盆休み

お盆を迎えて

墓前の線香は燃えつきる

そして灰になるだろう

お盆を迎えて

墓石に刻まれた名前が見える

その人たちはどんな生き様だったのだろう

お盆を迎えて

迎え火を焚く 送り火を焚く

煙は船岡山に向かうのだろうか

お盆を迎えて

死者はご先祖様となる

ぼくらもいずれ「ご先祖様」に…

暑い夏 八月ももうすぐ

終わる

— よね

愛知県豊橋市立南部中学校
三年 杉浦 遼将

花火の歌

ばーん

大きな音は

私の足をとめる

ぱつと咲く

一輪の花に

自然と目をうばわれた

絵にかいたような花は

少しずつきえていく

ばらばらと落ちる

大空のしずくは

この夏も

夜空をいろどる

愛知県豊橋市立南陽中学校
一年 羽田野 陽子

自然の歌

だれもない部屋で
あおむけになって
目を閉じた
声がする
外から
歌が聞こえる
セミの力強い声
鳥たちの歌声
自然が作った歌
自然の歌

愛知県豊橋市立南部中学校
一年 古池 音々

庭の草花・夏謳歌

愛知県豊橋市立南部中学校

二年 日高 由菜

(一)

垣根の下で鮮やかな
群青色の花をつけ
緑の葉上に露乗せて
茎つづら折り螢草
朝露ころがし笑ってる
陽光浴びて歌ってる

(二)

垣を突き抜けまっ白な
大きな花弁の花ひとつ
柔き細葉は百数十
茎まっすぐな鉄ぼう百合
酷暑・猛暑も知らぬ振り
天に届けと歌ってる

(三)

小さな鉢のナデシコは
座り込むよに咲いている
赤やピンクや紅白で

きれいでしょうと歌ってる
大きな鉢のアサガオは
屋根に届けとクルクルと
支柱を伝って伸びている
赤・青・白で三重奏

アリの歌

愛知県豊橋市立南部中学校

一年 佐藤 来菜

いたい！

思わず手を見た

黒い小さな物がいた

アリだ！

「なんでかむの？」

いじめたわけでもないのに

ふと下を見るとアリがいた

よく見ると

アリがぎょうれつを作っていた

なにか運んでいるみたい

白い物や茶色い物

「えっ？」「虫のしがいも？」

自分より大きな物を運んでいる

アリは力持ち

長いぎょうれつのさきはアリの巣

たくさんのアリたち

みんなせつせつせつと運んでいる

はたらきもののアリだけど

楽しいのだろうか

歌でも歌って運んでるのかな

それとも

ぶつぶつもんくを言っているのかな

アリたちは

穴の中に吸いこまれるように入って行く

中はどうなっているのだろう

女王アリやたくさんたまごはあるのかな

巣をこわすのはかわいそう

でもきつと

巣の中は大家族

みんな仲よく大合唱

そんな歌声が聞こえてくるようだ

私の耳には届かない

アリの歌だ

かみさまの歌

今日は雨

かみさまが雲の上で泣いて
たくさんの涙がはっぱにおちて
ぼたぼたとリズムをつくって

今日は雷

かみさまが雲の上で怒って
大きな声でどなって
ドォーンドォーンと力強く歌って

今日は晴れ

かみさまが雲の上で笑って
いきものたちが動き出して
わあわあといきを奏でて

明日はどんな歌かわからない
そんな かみさまの歌

愛知県豊橋市立南陽中学校

一年 テンプロ アンドレア

選 評

「帆・ランプ・鷗」賞

どれみの歌

小酒井 仁葉

「大切な君」って誰だろう？ 分からないまま読んでいくうちにスマホのことだと分かった。スマホを擬人化し、初めてそれを手にしたときの喜びが巧みに描かれている。「大切なメッセージはピン留めして／私の心に保存する」なんて表現もうまい。

ところでこの詩のタイトルがなぜ「どれみの歌」なのか。これも最初は分からなかったが、何度か読んでいるうちに、折句おりにくになっていくのに気がついた。折句というのは一つの詩歌の中に別の言葉を織り込む言葉遊びの一種で、伊勢物語の中の「かきつばた」を織り込んだ和歌が有名。作者はこれを学校で習って折句を知ったのだろうか。この作品では一行毎ではなく、一連ごとの頭に「ど・れ・み・み・ふあ・そ・ら・し」が織り込まれている。こうした技巧にも作者の知的レベルの高さがうかがえた。

優秀賞

木の歌

赤柄 袖希

木の成長に人間の成長（人生）が重ねられている。三連目の「風にあたって／葉や枝がゆらゆらと／ゆれている」というフレーズは、生きていく途上で遭遇するさまざまな心のふるえを象徴しているように思えた。

思い出歌

小林 優花

歌と思いは結びついている。そのことを作者はやさしい言葉で詩にまとめ上げている。過去の思い出だけでなく、今歌っている歌が、「どんな思い出を／連れてくるだろう」という最後の終わり方は秀逸。

佳作

運動場の砂の歌

伊藤 寿真

砂を擬人化し、その気持になって人間との関係を描くという着眼点がいい。最後の一行の「砂」は「誰」という言葉に置き換えて読むこともできる。

音符列車に乗って

宇野 真輝登

歌を五つの線路に乗って進む列車にたとえた発想が素晴らしい。その列車には誰もが乗れる。そしてみんなを幸せな気持ちにしてくれる。

空の歌

大野 実咲

日々刻々と姿を変えていく空への憧れ。最後の「どこへ行くのか／どこまで続いていくのかわからない」空は、作者の心のなかの空でもあるのだろう。

盆休み

杉浦 遼将

お盆のお墓参り。墓石に刻まれた名前からさまざまな思いをめぐらす作者の姿が見えてくる。

花火の歌

羽田野 陽子

打ち上がった大きな花火に目を奪われた一瞬が鮮やかに描かれている。落ちてくる火の粉を「大空のしずく」とたとえた表現は秀逸。

自然の歌

古池 音々

外から聞こえてくるセミや鳥の声を「自然が作った歌」と捉えたところに詩の発見がある。

庭の草花・夏謳歌 日高 由菜


庭に咲いているさまざまな花の様子が目に見えるように描かれている。最後の「赤・青・白で三重奏」はうまい表現だと感心。

アリの歌 佐藤 来菜

アリの生態がよく観察されて描かれている。「私の耳には届かない」と書かれているけれど、作者の心にはきくとアリの歌が聞こえていたに違いない。

かみさまの歌 テンプロ アンドレア

雨や雷や晴れといった気象がかみさまの歌として描かれている。最後の二行でとてもいい詩になった。



選者作品

風の五線譜

高階 杞一

風に葉っぱがゆれている

大きな葉っぱ

小さな葉っぱ

ぎざぎざの葉っぱ

まるい葉っぱ

黒い葉っぱ

黄色い葉っぱ

ひとつひとつが

風にゆれ

みんな

ちがった音を出している

みんな

きれいな曲を奏でている

詩集『空への質問』より

(一九九九年 大日本図書 刊)



【高校生の部】

選者

中本

道代



「帆・ランプ・鷗」賞

百薬の長

札幌市立札幌開成中等教育学校

五年 綺綸

優秀賞

耳をすませば

桜丘高等学校

一年 伊藤 雫

私にとつての歌

桜丘高等学校

一年 掛川 智史

蟬、爆ぜる

桜丘高等学校

一年 鈴木 陽向

雛の墓場

石川県立金沢桜丘高等学校

三年 山田 水祈

カラオケで他人が歌う知らない歌

大阪府立八尾高等学校

三年 間部 賢杜

佳作

歌って

桜丘高等学校

一年 市川 優衣

壇上の声

桜丘高等学校

一年 谷口 朝陽





あたりまえの生活

桜丘高等学校
一年 金田 愛梨

もう一度だけ

桜丘高等学校
一年 近藤 さくら

リズム

桜丘高等学校
一年 大森 悠生

緑の音

桜丘高等学校
一年 加地 秀成

人と人をつなぐうた

桜丘高等学校
一年 羽田野 真花

告

桜丘高等学校
一年 山浦 左京

声

桜丘高等学校
一年 近田 天飛

円盤

星槎国際高等学校
二年 藤野 栞



入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

百薬の長

札幌市立札幌開成中等教育学校

五年 綺繪

歌。

それは薬

推しの「大好き！」が

私を幸せにする

推しの「大丈夫！」が

私を奮い立たせる

いつでもどんなときにも

音速で効果の表れる

即効性の薬

歌。

それは薬

ずっと昔に流行った曲

ずっと昔の体育祭で流れた曲

あのメロディを聞くだけで

一瞬であの時へタイムスリッ

楽しかったことも

つらかったことも

思い出として蘇る

遅効性の薬

これには

悪さをする副反応なんてないし

分量だって決まってい

自分で作ることも出

来れる大人にも子どもにも効く

歌こそ百薬の長なのかもしれない



優秀賞

耳をすませば

桜丘高等学校
一年 伊藤 雫

耳をすませばきこえてくる
歌詞のない小さなメロデー

日々の雑音の中で

顔も名前も知らない誰かの鼻歌が
耳をすませばきこえてくる

心地よくて安心する小さな音色
今遠くのどこかで歌う誰かの鼻歌が

風にのってきこえてくる

耳をすませば

私にとっての歌

私にとっての歌は

大きな海原のように感じる

青く綺麗な海のように

人の心を明るく爽やかな

気持ちにさせてくれる歌

夜の静かな海のように

人の心を落ち着かせ安らかな

気持ちにさせてくれる歌

嵐の荒々しい海のように

人の心を突き動かし高揚した

気持ちにさせてくれる歌

夕焼けに赤く染まる海のように

人の心を寂しく別れを惜しむ

気持ちにさせてくれる歌

同じ海がないように
同じ歌も一つもない

そんな歌が私は好きだ

桜丘高等学校
一年 掛川

智史

蟬、爆ぜる

桜丘高等学校
一年 鈴木 陽向

いつも通りの散歩道、

ふと前方に目を向けると、
道端に一匹の蟬が落ちていた。

既に死んでいると思い、
何も考えずに横を通り過ぎようとした。

すると、

急に蟬が動き出し、

命を爆発させたかのような

とてつもない音の歌を歌いながら、

その歌と共に空へ消えていった。

こんなささいな非日常を求めて、

僕は今日も散歩をする

雛の墓場

石川県立金沢桜丘高等学校
三年 山田 水祈

創作が過程か終着か
僕らの違いを明確にするだけ

うた

背を追っている

道程が終着点なら、過去になるしかない

見えなくなるのは輪郭の歪み

はつきりするの君の色

焼き付くような光が、美しいねって囁きにまと

われること

幸福以外の言葉はないんだ

気づきは鮮烈

視界が広がって、ぼやけて、鮮やかになって

何でもなかった顔をして、もどる

気づきは鮮烈

一生忘れない衝撃

きらめきは、傷の形で

真綿に気づいたら吊るしかないから、じゃあ作
曲なんてしなければよかった

失敗を愛せるかな

美しい私を尊べるかな

ねえ、

昨日のことはまだ、覚えていたいのかな

カラオケで他人が歌う知らない歌

大阪府立八尾高等学校
三年 間部 賢杜

見たこともないアーティスト

聞いたことないタイトルが

画面に浮かび上がるとき

全く知らないイントロに

部屋の空気が攪われる

一旦周りを見渡せば

誰もがみんなすまし顔

知った曲だと言うように

一人がマイクを手を取って

やおら拍手がはじまった

音を聞きつつリズムとり

コップを取って隣向き

「懐かしいな」と知ったかし

「そうでもない」と返される

マイクの主は熱唱す

曲はだんだん盛り上がり

おそらくサビに入ったが

なぜかイマイチ乗れないで

画面に出てる歌詞たちを

読みはしないで目で追った

笑顔で身体揺らしときゃ

知ってる風を装える

何度か聞いたメロディーに

合わせて鼻歌歌つときゃ

知らないことはバレないし

なんなら「通」を装える

歌い手気分のある人は

歌が終わってマイク置き

気持ち良さげに微笑んだ

私は彼の歌声

を

採点機能で下手を知る

佳作

歌って

桜丘高等学校

一年 市川

優衣

歌って不思議だ
覚えれないと思っても
歌にすると
不思議と覚えてしまう

でも、この世には「歌」というものがある
歌の力を借りて困難を乗り越えようと思う

歌ってエネルギーだ
悲しい時も
つらい時も
前向きになれる

歌って思い出だ
あの頃のなつかしい風景
あの時一緒に歌った人
どれも大切な思い出

未来は見えなくて不安でいっぱいだ

壇上の声

不思議に思えた
壇上に並ぶ列の中の
一段前の同級生が
自分の視線のすぐ下で
肩を揺らしながら
震わせる声を聞いた
思いもよらず唐突に
終わりを示すこの式で
ふさわしく涙を流せるなんて
心底うらやましく思い
怒りだろうか
悲しみだろうか
やはり悔しいのだろうか
自分と気持ちは同じなのか
もう聞けはしないと思ったが
きつとそうだと
思えたのだ
そして声を重ねた

桜丘高等学校
一年 谷口 朝陽

あたりまえの生活

桜丘高等学校
一年 金田 愛梨

あたりまえのように学校にかよう。
あたりまえのように友達とお弁当を食べる
あたりまえのように部活をする。
そんなあたりまえの日々がいつまでも続くとは
限らない

それが
一瞬でなくなる怖さは
いつまでも心の中で
生き続けなければならぬ

中学校3年の合唱コンクール
毎日死にもぐるいで練習に励んだ
何度もぶつかり
何度もすれちがうなかで
ふと歌詞に気持ちを向けた

「群青」には
作詞した生徒の
あたりまえの生活の破壊
悲しさや寂しさが残されていた
今あるあたりまえの生活

もう一度だけ

桜丘高等学校

一年 近藤 さくら

あなたの歌声を聴く

小さな箱の中で

あなたがマイク越しに歌った「愛してる」

もう二度と私の耳に届くことはない

あなたと私の長い長い関係は

たった五文字で終わってしまった

時計の秒針だけがチクタクと流れ

ほんの一瞬のできごとがまるで永遠のように感じられた

あなたが好きと言っていたあの歌を聞く

あなたを想いながら口ずさむ

もしまだあなたが私の横にいたら

もう少しだけ上手く歌えていたかもしれない

あなたがいないこの夜を眠る

静寂が聞こえぬよう枕で耳を塞いだ

蟬の抜け殻のように動かなくなってしまった私を
もう一度蟬に戻すことはできない

あなたと過ごす幸せを知ってしまったから

あなたの歌声を思い出す

あなたの名前を何度も呼び

小さな瞳で大きな世界を探す

あなたが私ではないだれかに

同じ歌を歌う前に

あなたのその不器用な「愛してる」が

他の人のもものになってしまいう前に

リズム

桜丘高等学校
一年 大森 悠生

この人のリズムは低いな…じゃあ僕も低く…
この人は高いのか…じゃあ僕も高くしなきゃ…
どうしよう…

このままだとみんなのリズムに追いついていかれち
やう

どうしよう…どうしよう…僕は…

…違うな

乗るべきリズムは…

合わせなきゃいけない音は…

オレの…気持ちだ!!

オレの気持ちこそが、

真のリズム

忘れかけていたオレの心の声

音量上げろ

もうすぐオープニングの時間だ

緑の音

自然の音、大地の音

音に生まれ生まれてきた自分

生まれ育った地はともいなかでのどかだった

だからこそ聞ける音

虫の音、風の音

これから人々が守らないといけない音

命の音

桜丘高等学校

一年 加地

秀成

人と人をつなぐうた

桜丘高等学校

一年 羽田野

真花

人と人をつなぐもの
それは

言葉がわからなくても

人を楽しませたり

感動させることもできる

小さい子から大人まで

つなぐことができる

ネットを通じてつながる機会が増えてきた

自分の気持ちを伝えるためには

直接会って話したり

歌ったり

でも人を楽しませたり

感動させることができるのは

「歌」だと思った

人と人をつなぐうた

それは

言葉がわからなくても
人を楽しませ感動させ
つなぐことができる

告

桜丘高等学校
一年 山浦 左京

今から僕は息をする

一本の短距離走を駆けるように

一ミリグラムの声を轟かせる

「別になんのとリエも無いからさ」

そんな何かを隠すように

ぎりぎりの命は見栄を吐く

今から僕は哀を告げる

今日も僕は息をする

映画のエンドロールを描くように

哀に満ちる心を殴る

「別に誰も分かりやしない」

ただただ必死になつてる

「ねえ何か言つてよ」

そんな妄想ばかりの歌に

僕は抗い続けてる

今日も僕は哀を告げる

最終僕らは今日もさ

弱さを隠して歌い続ける

このまま化石になつちまう

「それでもいいじゃん」

今日も誰かと歌つてる

「それじゃあまたね」

小さな声が木霊する

今日も僕らは愛を告げる

声

今も昔も声から歌はできている

大地の声

植物の声

動物の声

風の声

自然の声はどこにでも

機械の声

建物の声

人々の声

街に行けば

人工の声はそこにある

全ての声は今も生きて歌になる

桜丘高等学校

一年 近田

天飛

円盤

星槎国際高等学校
二年 藤野 葉

取り返しをつかない傷がついてしまうから

上辺の共感を奏でている
ありきたりなりズムに乗り 動かぬ心
首を縦に動かせても
横に振ることには不慣れだった

空回りするメロデーライン
震える指先 的外れな音を響かせる
隠れていた傷が悪さして
サビもそっけない一言も聞き逃した

渦巻く不安をひっかいて
いつかの誤ちに耳をすませる
舞うほこりに飲み込まれ
どれもこれも同じ色になった

ひっくり返して 違う顔を楽しもう
代わり映えしない評価は飽きてしまうから
針を落としたら もう引きずらない

選 評

「帆・ランプ・鷗」賞

百薬の長

綺繪

好きなアーティストの歌を聞くとその瞬間に幸せになれる、元気になれる、勇気がみなぎってくる、そんな歌の力を「即効性の薬」にたとえています。「音速で」という言葉が効いていますね。また、昔のなつかしい歌を聞くだけで思い出の時へとタイムスリップできる、そんな歌の力は「遅効性の薬」だと言っています。三連目は薬としての歌のすばらしい点を一つ一つ挙げていって、人間にとって歌には薬以上の不思議な力があるのだと感じさせてくれます。同じような主題の詩は他にもありましたが、綺繪さんの作品が一番よくまとまっていて、歌の力について十分に考えられていると思いました。

優秀賞

耳をすませば

伊藤 雫

耳をすませば……遠い誰かの鼻歌が聞こえてくるというのですね。耳をすませ、というのとは心をすませますこと。それは遠くにいる見知らぬ人の声かもしれないし、伊藤さんの心の奥から聞こえてくる歌なのかもしれませんね。

私にとつての歌

掛川 智史

歌を大海原にたとえ、歌が、海のような姿を見て感じるような気持ちにさせてくれることが書かれています。「同じ海がないように／同じ歌も一つもない」という発見があります。詩は、自分なりの発見を書くことが大切です。

蟬、爆ぜる

鈴木 陽向

死んでいるのかと思った蟬が、突然大きな声で鳴いて空へ飛んで行ったのを見たのですね。「命を爆発させたかのような／とてつもない音の歌を歌いながら」という二行に、蟬の命への感動がよく表れています。

雛の墓場

山田 水祈

「雛の墓場」とは何なのでしょう。タイトルで心を掴まれます。どの行も山田さんの主観に沿って書かれていて少し意味がわかりにくいのですが、それぞれの言葉に切実な思いが込められていることは強く伝わってきます。

カラオケで他人が歌う知らない歌

間部 賢杜

カラオケでよくある情景や心理を描写していますが、自分や他人を醒めた眼で見るユーモラスな感覚が優れています。全体を七五調のリズムで通し、各連を五行か六行でまとめている、技術的にもなかなか高度です。

佳作

歌って

市川 優衣

この作品も歌の力について書かれていますが、「歌にすると／不思議と覚えてしまう」というところに市川さんの発見があります。

壇上の声

谷口 朝陽

卒業式の時、同級生が涙とともに声を震わせて歌うのを聞いて作者は心を惹かれます。感動とは言わずに、強い感動を表現しています。

あたりまえの生活

金田 愛梨

合唱コンクールの歌の歌詞から、あたりまえの生活の尊さに気がついたのですね。それは一生懸命練習した歌からの贈り物なのでしょう。

もう一度だけ

近藤 さくら

好きだった人との別れの悲しみが、その人の歌声の思い出の中に響いている……その寂しさが、読む者の心にも沁み込んできます。

リズム

大森 悠生

「オレの気持ちこそが、／真のリズム」……迷いながら大切なことに気づき、終行に向って高揚していく、勢いのある詩です。

緑の音

加地 秀成

虫の音や風の音などを「命の音」として、守らなければいけないと言っています。それらこそ自然界に満ちている歌なのです。

人と人をつなぐうた

羽田野真花

言葉がわからなくても、年齢が違っても、感動を通じて心をつなぐことができる歌の力について書かれていて、説得力があります。

告

山浦左京

「哀を告げる」が「愛を告げる」になって終わるといふ展開に驚きがあります。自分独自の言葉を必死に探っていてとても個性的。

声

近田天飛

自然の音も人工の音も「声」と捉え、「すべての声は今も生きて歌となる」といふ終わりに向って、歌が大きく広がっていくようです。

円盤

藤野 栞

自分の心の動きをレコードの動きに例える発想がとてもユニーク。発想に独自性のあることが、詩を書く上での宝物になります。

選者作品

Pale September

中本道代

白いカーテンがひるがえり続ける
教室の窓ガラス
雨滴のあとにはほこりが付着して
一面にかわいている
夏休み 無人の校舎をとり囲んで
何度もあった激しい雷雨

秋の音は
どこからくるのだろう
少女の歌声
こえはどこからくるのだろう

もう秋だ
と人が言った
私たちは黙っていた

黙っていた私たちに
別々の秋が始まっていった

お祭りの夜店にならぶ
さまざまなお面をつけた秋
高層ビルとビルのあいだで
方角を失う秋

騒々しい教室で
窓をふりむいた一人の目が
ふいにコップの中の水
になる

どこからくるのだろう
あの音

机の上に一枚ずつ
同じ白紙を配られて
何も見えないものをのぞきこむ
一人一人

詩集『ミルキーマイ』より
(一九八八年 思潮社刊)

丸山薫の略歴と業績

明治三十二年 六月八日大分県生まれ。

明治三十八年 内務省官吏の父の転勤で京城（ソウル）へ移住。

明治四十四年 父の死により母方の祖父の地、愛知県豊橋市に移る。

大正 七年 東京高等商船学校（現・東京海洋大学）に入学。病気のため退学。

大正 十年 第三高等学校（現・京都大学）に入学。

大正 十五年 東京帝國大学（現・東京大学）に入学。

・昭和元年 『新思潮』同人となる。

昭和 三年 高井三四子と結婚し、詩活動に専念。

昭和 九年 堀辰雄、三好達治と詩誌『四季』を創刊。

昭和 十年 第一回文芸汎論詩集賞を受賞。

昭和 二十年 山形県西川町岩根沢に疎開。岩根沢国民学校代用教員を務める。

昭和二十三年 疎開先の山形県西川町岩根沢から愛知県豊橋市に戻る。

昭和二十四年 愛知大学講師、後に教授となる。

昭和二十六年 中部日本詩人連盟結成、委員長となる。後に中日詩人会に改組され、引き続き会長。

昭和三十二年 第十回中日文化賞を受賞。

昭和四十二年 旧四季同人を中心に詩誌『四季』を復刊。

昭和四十九年 愛知県豊橋市の自宅で永眠。

丸山薫の作品には、第一詩集『帆・ランプ・鷗』をはじめ『幼年』『物象詩集』『青春不在』『連れ去られた海』『蟻のいる顔』など十六冊の詩集と、短編小説集『蝙蝠館』、『エッセイ集』『蟬川裸記』、その他多くの詩選集『丸山薫詩集』がある。

没後、昭和五十一年に『丸山薫全集』全五巻が刊行され、さらに平成二十一年は、丸山薫の生誕百十年、没後三十五年に当たるため、全六巻からなる『新編 丸山薫全集』が刊行された。

豊橋市高師緑地には丸山薫詩碑が発起人桑原武夫氏らによって建立され、また、愛知大学豊橋キャンパスには、丸山薫作詞の学生歌の詩碑が愛知大学短期大学同窓会によって建立されている。その他、山形県西川町には詩碑が建立され、丸山薫記念館がある。



丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞は、丸山薫賞の運営委員として丸山薫の業績の顕彰と普及に取り組み、本市の文化振興にご尽力された「故 神野信郎氏」によるご寄附を財源に、実施しています。

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞 作品集

令和5年度 第3回 「歌」

令和六（二〇二四）年二月三日 発行

発行 豊橋市文化・スポーツ部「文化のまち」づくり課

〒四四〇一八五〇一 豊橋市今橋町一番地

電話 〇五三三一五一―二八七四

FAX 〇五三三一五六―一〇八一

E-mail bunka@city.toyohashi.lg.jp

印刷所 (有) 伊藤印刷

✳表紙・裏表紙イラスト 佐野妙

